

入内して尾崎へ引京都の御使を遣はし、さうして
田中清景英子懷妊の子何卒男子誕生あるやうに御祈
ひをなさ給へ。唯一心で祈る所は、宝殿より童を三人
出現して魁一心の真心明所なり心易くさうして我より
守るべし。亦大教坊より山伏を召連て加持被すべしと
宣ひて宝殿へ入る。又清景入内御前より二度屏伏して
大教坊の御へ行くれど、大教坊より、あゝ、あゝ、と
一連の事を共に尾崎より保元二年の三月十三日甲子
誕生田中清景に事恨る。清景を大教坊より上
平親と改ひ奉り、十歳の時尾崎衡成とて仁安二年

の春通政の家人共馳参り、其年六月大井太政公後
外相ハ春光院本勘り田次官友尹村岡三郎良房
下平三連學養助定親山田三郎教令鳥羽左衛門尉
盛光を初とて二十余人馳参り、衡成を公を初とて
田中清景に事恨る。

御母崇業子嘉應元年八月十九日二十九歳まで崩去
日、清景を公より召家人を托元へ召しとて、やう成
長い。親の教を討て、さうして作られ。さうして
法成を武成、四海を托ひ、長者を托め、さうして法成元
丁酉の年、伊豆より、右兵衛佐頼朝、夢より、保元